

## 『北東アジア・市民社会・キリスト教から見た「平和」』のご紹介

かつて「TK生」のペンネームで『韓国からの通信』を執筆し、韓国民民主化運動を支えた池明観<sup>チミングァン</sup>は、最晩年に数度訪れた都内の富坂キリスト教センターを拠点に北東アジア市民による国際連帯を訴え続けた。宗教哲学者である池は、平和、正義、人権といった民主主義的価値を目指す現代史に参与するべく、北東アジア各国の文化の相違を「豊かさ」としてとらえ、アジア共通の平和思想史観へと進むべきであると説いた。

この池の平和への祈りから生まれた「北東アジアにおける平和思想史研究会」の果実である本書は、「地域」「市民」「宗教」といったキーワードに注目し、以下の三部に構成されている。

第一部「北東アジアにおける平和思想の課題とチャレンジ」は、地域の創造的形が平和思想と戦略上きわめて重要であること（李鐘元・早稲田大学大学院教授）、国際社会から見た中国の「平和的台頭」の真相（謝志海・共愛学園前橋国際大学准教授）、多様性の受容と調和を目指す朝鮮の平和思想史と南北朝鮮の合意事例（李チャンス・韓国報勲教育研究院長）を紹介する。

第二部「平和思想と市民社会」では、平和とパブリック・ディプロマシーの関係から見た日韓草の根市民運動の可能性（金敬黙・早稲田大学文学学術院教授）、和解と平和構築を目的とする平和教育の実践例（松井ケティ・清泉女子大学教授）、沖縄の搾取構造と米軍基地の問題から主体的な「連帯」への構築（大城尚子・沖縄国際大学非常勤講師）について論じられている。

第三部「平和思想と宗教」では、「神の国」理解と国家・宗教・ジェンダーの相互作用の検証（神山美奈子・名古屋学院大学准教授）、台湾の教会における平和と民主化運動の役割（黄哲彦・台湾キリスト長老教会総会幹事）、近代以降の日本におけるアジア認識と宗教ナショナリズムへの批判的分析（山本俊正・関西学院大学元教授）の考察がなされている。

近年、日中韓三国間における「現代版鎖国」状態が続いているが、最近ではロシアのウクライナ侵攻により北東アジア地域はこれまでにない極度の緊張に包まれている。二十一世紀の平和は、「北東アジア地域を共同で考え、相互に協力すること」であり、「過去を想起すること（リメンバー）が人々を再構成し（リ・メンバーリング）、そこから将来の展望が明確になる」と説いたのは、池の友人・呉在植<sup>オージェシク</sup>である。

いま必要とされるのは、将来に向けて過去を問い、現在を批判的に捉えてオールタナティブな社会を構想するための想像力であろう。国境の向こうに想像力を働かせ、相手の多様性や変化に注目し、アジアとの関係を新たな視座で組み直す。時間と空間を基軸とした市民交流を幅広く展開することが肝要である。信頼と対話に基づく平和を北東アジアにおいていかに実現するのか。国際政治、比較宗教、平和学、包括的平和教育、神学など日韓中台沖の専門家による学際研究の本書は、二十一世紀型の平和と和解への提言と豊かなインスピレーションを余すところなく読者に提供してくれるはずである。

2022年4月

富坂キリスト教センター総主事

岡田仁